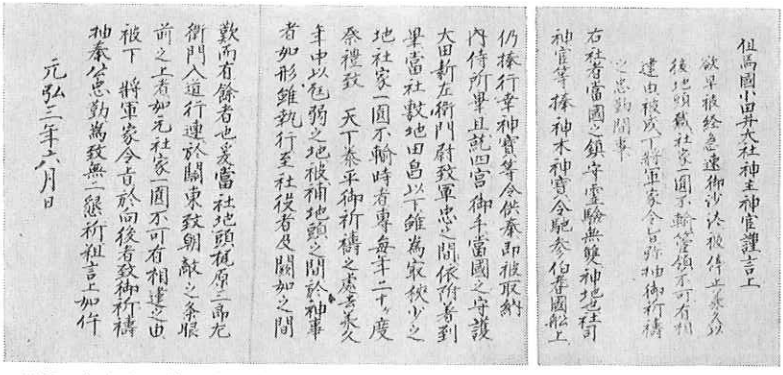
第四章　南北朝・室町時代の豊岡

第一節　南北朝の争乱

建武中興と小田井社

鎌倉幕府を打ち倒して天皇政治を復活したい希望は後鳥羽上皇以来、京都の公家側の理想であった。後鳥羽上皇の討幕、いわゆる承久の変は無惨にも失敗し、雅成親王が高屋に配流となった。後醍醐天皇も院政を廃し、鎌倉幕府打倒の計画を進めたが、正中の変や元弘の乱で失敗し、隠岐へ配流となり、第四皇子・聖護院静尊法親王は但馬に配流となった。配流地は但東町の畑山の日出神社の付近とされている。

しかし、護良親王・楠木正成などの挙兵により討幕計画は進展し、元弘三年（一三三三）閏三月に後醍醐天皇が隠岐脱出に成功すると、風を望んで因幡・伯耆・出雲・美作・但馬・丹波・若狭の兵が集まり、千種忠顕を奉じて京都奪回作戦に従う。このとき、但馬守護・太田守延の立場は微妙であった。彼は永年恩顧をうけた幕府に対する節を守って人質同然の静尊法親王の監視を強化して、京都攻略の千種忠顕の軍を後方の但馬から攻撃し得る立場にいた。北条氏の命運は、まだ明確になっていない。北条につくべきか反すべきか。このとき彼は、京都側に投じて静尊法親王を奉じて上洛し、千種軍に加担する。恐らく、千種忠顕の軍勢催告に応じた



但馬國小田井大社神主神宮謹言上
欲早被給急速御沙汰被停止兼久跡地頭職社家一圓不輸籠領不可有相違由被成下綸旨家令旨殊抽御祈禱之忠勤間事
右社者當國之鎮守靈驗無雙神地積司神宮等據神木神寶令馳參伯耆國船上仍據行幸神寶等令供奉即被取納內侍所畢且就回宮御年當國之守護大田新左衛門尉致軍忠之間依預著到畢當社數地田畠以下雖為寂寥少之地社家一圓不輸時者專毎年二ヶ度祭禮致天下泰平御祈禱之處去長久年中以包弱之地被補地頭之間於神事者加形雖執行至社役者及闕加之間數而有餘者也爰當社地頭梶原三郎左衛門入道行連於關東致朝敵之条眼前之上者加元社家一圓不可有相違之由被下將軍家令旨於向後者致御祈禱神奉公忠勤為致無二懇祈祖言上如件
元弘三年六月日

写95　船上山の後醍醐天皇行在所に小田井社神主が馳せ参じたと伝えると伝える小田井社文書　（大石久子氏蔵）

ものであろう。

小田井神社でも同様に、千種忠顕の軍勢催告があったもののようで、隠岐脱出の後醍醐天皇についた。天皇が隠岐から京都に入ったのは、元弘三年（一三三三）六月五日のことであるが、そのことは小田井神社の神主が申し立てた書状の内容から判明するのである。この書状の原本は江戸時代に焼失し、現存するものは写本というので、一等資料というわけのものではないが、それによると次のような経過が知られる。

後醍醐天皇が隠岐から脱出し、伯耆の船上山を行在所とした時、小田井神社の神主たちは真先に神木・神宝を奉じて馳せ参じ、行幸の供をして内侍所を移した。また、静尊法親王に従い、太田守延の配下に属して戦功をたてたので、その賞として地頭で入り込んでいる関東御家人の梶原三郎左衛門入道行蓮を召し放してほしいと願っている。恐らく、六波羅攻めにも参加したことだったろう。

気比城の合戦

小田井神社の社家たちは戦功の行賞として、ひたすらに地頭の排除を願い、社地一円の管理を求めたが、恐らくこれは果たされなかったことであろう。後醍醐天皇は、天皇

を中心とした国家的土地所有の政策を目指していたからである。ここに、新政権に不満を持つ地方小集団を味方につけた足利尊氏が登場してくる。延元元年（一三三六）正月、京都に入った尊氏は二月に敗れて鎮西へ向かい、勢力を回復して東上、五月の湊川の戦いで勝利を収める。この間、尊氏の東上作戦に呼応して但馬・丹波で側面防禦の戦いが展開する。丹波方面の司令官は足利尊氏の弟・直義の輩下の桃井盛義であり、但馬は足利尊氏の輩下の今川頼貞である。頼貞は三月に播磨に入り、ついで四月には但馬に攻め入っている。五月三日の朝来郡牧田（ひらた）村河原の戦闘のあと五月十六日、気比城の攻防戦が展開する。播磨の住人・広峰久太郎昌俊の弟が、今川頼貞の軍に属して参戦し、右の股に負傷している。気比城に籠った武将の名は全く不明であるが、気比庄を含む海岸地帯に勢力を伸ばしていたのは但馬守護の太田氏であり、但馬守護の太田守延は六波羅攻めに参加したりしていて一応、後醍醐天皇の新政府に与同している。太田守延は六波羅攻めに戦死するが、たとえ太田守延が戦死しても南朝の勢力が強ければ、但馬守護・太田守延が持っていた領地は、そのまま一族で保持することも可能だろうが、武家方が今川頼貞を但馬守護として送り込もうとする情勢下では、用捨なく太田守延の持つ領地、いわゆる守護領を没収したことだろう。

このとき抵抗を招いたというから、太田一族のあるものが気比城に拠って南朝に加担し、あくまでも武家による領地の没収を拒否しようとしたものか、すでに没収された領地を奪回せんとしたものであろう。

この気比城の攻防戦で、今川頼貞の但馬の作戦は終了する。頼貞は帰服した但馬の武士団を率いて京都に入り、尊氏の軍隊と合流する。

写96　三開山上城跡に建つ新田義宗追善の墓碑

尊氏の入京により後醍醐天皇は難を比叡山にさけ、天皇の軍は京都を攻撃する。この一連の戦闘の間に政権は分裂し、南朝と北朝の二統が成立する。但馬では、比叡山の指令を受けて末寺の進美寺（日高町）では南朝に組みしたが、豊岡の南朝の拠点は三開山であった。

三開山城と田結庄城

後醍醐天皇の吉野潜幸に先立って、新田義貞は北陸に走り越前・金ヶ崎城に拠っていた。さきには今川頼貞の進攻作戦が行なわれており、但馬ではどちらかといえば北軍の勢力に付くものが多かった時である。北国の義貞の存在は、但馬の南軍にとって大きな精神的支柱であった。延元二年（一三三七）正月、但馬の南軍は援けを金ヶ崎城に請い、義貞は子の義宗を派遣した。義宗は六方田圃の東縁の三開山城に入ったが、恐らく海路をとって来着したものであろう。ここで新田義貞・義助は北国から、新田義興は南方から攻め上がり、新田義宗は但馬から因幡・伯耆の南軍と協同して京都へ攻め上がろうとする雄大な進攻作戦が計画された。

尊氏方では足利直義が一族の小俣来全を遣わして、但馬・丹波の南軍を撃たせた。来全の配下は前年、今川頼貞の進攻作戦によって北軍に依付した但馬の将士が参加している。延元二年（一三三七）六月二十一日、田結庄城が攻撃を受けた。田結庄城とは、後に山名の四天王の一人に数えられる田結庄氏の居城のことであろう。

気比の庄に隣接する田結庄は『但馬国太田文』によると、安芸重道の娘が地頭職を得ている地である。この安芸氏は安美郷の地頭・大江氏の次女の夫である安芸之助の所縁のある人と、さきに推定をしておいた。もちろん、関東の下り衆である。安芸氏は、在地の太田氏とがっちりと組んで勢力関係の維持を計っている。このことが逆に、田結庄の地の中に太田氏の力が入り込む機縁となったものだろう。

その後の時の経過の中で、気比庄の太田の力が大きくなり、太田の一族の中のある者は田結の地に住みつき、太田を姓としないで地名を採って、田結庄と号するようになったものがあったのではなかろうか。それでなければ、田結庄氏があれだけ急速に勢力を伸ばして山名の四天王の一人に数えられる理由が分からないし、建武の中興に際し戦死した但馬守護・太田守延の子孫というものが、全くばったりと屏息して、史上に名を見せないようになる理由も説明がつかない。但馬守護・太田氏の系譜は気比庄を分有していた太田氏の系譜の中に、それも田結庄という氏の名の下に受け継がれていったと想像したい。

それで延元二年、小俣来全が攻撃した田結庄城というのは、先に延元元年に今川頼貞が攻撃した気比城と同一のものであり、その城主は但馬守護・太田の一族である田結庄氏だったと提言しておく。田結庄氏が居城を現在の愛宕山（田鶴野地区）に築くようになるのは、後年のことである。

田結庄城の寄手の当日の総指揮官・仁科義人将監の下に小佐郷（八鹿町）の地頭・伊達義綱の名が見える。『建武年間記』によると仁科左近将監盛宗、『太平記』には仁科信濃守氏重などの名が南軍として見えており、仁科氏の一族が吉野方と京都方に分かれている。

田結庄城の攻防の結果は分明しないが、このころ但馬では北朝の年号が使用されており、尊氏の勢力が但馬

写97　足利尊氏の寄進状
（市指定文化財・金剛寺蔵）

を圧しているから田結庄城の命運は非なるものがあったろう。今川頼貞は但馬・若狭の勢を催して、越前に向かい義貞を攻めた。翌年、延元三年（一三三八）に新田義貞は戦死する。

北国の南朝の勢力が急速に低下すると今川頼貞は、反転して但馬の南軍の拠点つぶしにかかる。

金剛寺の利生塔

京都に成立した北朝によって足利尊氏が将軍に任命されたのが、暦応元年（一三三八）のことである。この前年、三開山城と田結庄城の戦いがあり、この年には北朝の光厳上皇は、白川某をして、法勝寺領但馬国分寺（日高町）を元のように領知をさせ、翌年の暦応二年（一三三九）になると進美寺城（日高町）を今川頼貞が攻撃しているという状勢を背景に、尊氏はこの年十二月二十六日に金剛寺に対して池内村と押坂社を寄せて塔婆料所に宛てている。

足利尊氏は敵方となった後醍醐天皇の怨霊を恐れ、夢窓疎石のすすめに従って弟の直義とともに、後醍醐天皇以下戦没者たちの冥福を祈るため、国ごとに一寺一塔を建立する計画をたて、貞和元年（一三四五）に光厳院の院旨を得て寺を安国、塔を利生と称することとした。とはいえ、これは全国一斉に建立されたものではなかった。初めに建立されたのが暦応元年（一三三八）の和泉の久米田寺であったというから金剛寺では、これにつぐ全国でも早い時期に、しかも利生塔という名前が決定する以前に造塔が行なわれている。利生塔は印度

の阿育王の八万四〇〇〇塔や隋の元帝の舎利塔などに範を取ったといわれ、旧仏教系の最有力寺院に設置されることが多かったと考定されているが、利生塔は今はない。金剛寺の寺歴について詳細なことは分からないが、嘉吉三年（一四四三）に但馬・金剛寺の用超が伏見宮貞成親王について金剛経を献じ、祈願寺とならんことを請うているが、地方の寺院が皇室とか幕府の祈願寺に選定されるには、寺にまつわる由緒が大きく作用しているので、金剛寺は当時、大きく寺威を輝かしていたことだったろう。

このように円山川下流域に足利尊氏の力が強く延びている時点では、尊氏によって任命された但馬守護・今川頼貞の勢力は昂揚期でもあったが、但馬北部の山地に拠る南軍の抵抗は根強かったので、大将支配の軍政を完全に守護支配に移すことはできなかった。やがて、隣国の因幡の国から新しい勢力が入り込み、尊氏―頼貞による守護支配の切り崩しが行なわれるが、その勢力者は山名時氏といった。

山名時氏、三開山に入る

このころの足利幕府は、足利尊氏とその弟の直義との二頭政治であったが、二人はしっくりしていなかった。南北朝八〇年の経過は南朝と北朝との間の争いの形をとりながら、北朝側の内部でも足利一門の中の、このようなしこりのために、三つの勢力が入り込んで複雑な抗争を展開した。この中で山名時氏は初め、尊氏党に組みしながら、後に反幕府の立場をとって直義党に属し直義の死後は、その子・直冬と提携して南朝に通じ、三つ巴の戦いの間に但馬を自己の手中に入れてしまう。

山名氏は新田義重の長男・義範が上野国多胡郡山名郷の地に所領を与えられた時に始まり、山名時氏も一介の百姓に過ぎなかったが、この争乱の過程に因幡・伯耆を拠点として力を伸ばし、丹波守護となったのが康永二年（一三四三）のことである。この年、丹波守護・仁木頼年の代官・荻野朝忠が叛いたため、仁木は丹波守

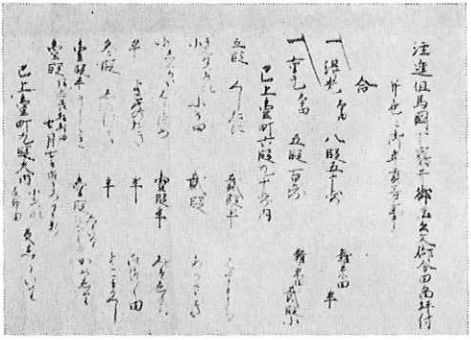
護を辞し、幕府は時氏を丹波の守護として荻野朝忠を討たせた。この時、早くも但馬の武士が時氏の軍に従っている。荻野の反乱は康永二年十二月だったが、翌年の康永三年二月には山名時氏はその子とともに三開山城を攻略し、これを陥れている。三開山は引き続き、南朝軍の拠点として保持されていたものであろう。本来なら今川頼貞が攻撃しなければならぬ所を、今や山名時氏が攻めたて、あっけなくも陥落させている。今川頼貞の但馬支配に対する、山名時氏の初めての挑戦であった。この時、太田・八木・三宅・田結庄・長らの但馬の武士が時氏についたという。時氏は三開山城に移り、自ら但馬守護と称した。三開山城は延元二年（一三三七）には、新田義宗が南朝の旗をあげたところであった。この時氏父子の三開山攻めの話は『南朝編年記略』に収められているが、その出典として引用したのは『妙楽寺文書』であった。この文書は現在、すでに失われて今、その真偽を質す手段もない。

下鶴井庄　山名時氏が三開山城に入ったと伝える康永三年（一三四四）は、後醍醐天皇の建武の新政から数えて一〇年目に当たる。この間、但馬守護として名前を見せるのは直義党の小俣来全、ついで尊氏党の桃井盛義、今川頼貞の三名である。このころの守護は鎌倉時代の守護とは違って大きな権能を有し、領国の国人層を家臣団に編成して領主権を拡大しつつあったので、特に守護大名と呼び慣らわされている。その権能の一部に、欠所地の裁断権があった。但馬でも、南朝と北朝の抗争が続いている間に、幾多の犠牲者が出た。ある者は戦死し、ある者は戦いに敗れて他郷へ移ったりすると、知行人のいない土地ができたり、勝者が敗者の所領を没収したりして欠所地が生じる。この処分権を一手に握っているのが、守護であった。

他方、南朝では頽勢を挽回しようと盛んに各地の武士の協力を呼びかけるので、但馬のあちこちでこれに応

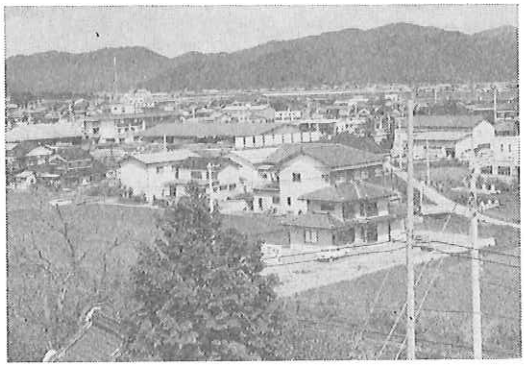
じるものが現われ、小ぜりあいが続き、但馬の各所に欠所地が生じる。下鶴井庄は、さきに但馬守護領の一つに加えられ、太田政頼が公文として臨んでいた土地であったが、貞和四年（一三四八）二月に但馬・丹後国境にある大高山の南朝勢力が落城した作戦に関連したものらしく、下鶴井庄が欠所地となっている。恐らく、下鶴井庄の公文か下司を勤めていたような武士が南朝に与同したが、但馬守護・今川頼貞の軍によって敗れ、その土地が没収されたものであろう。

鎌倉時代には下鶴井庄の公文職は但馬守護・太田政頼が所持しており、その下の田所職を保持していたのは下鶴井三郎秋正であった。下鶴井秋正は国御家人であって、この地に成長した有力者で、建武中興に太田氏が脱落した後にも、引き続き下鶴井庄の地には下鶴井秋正のような有勢者がおり、隣りの田結庄氏が田結庄城によって今川頼貞に反抗したのと同じように、今川頼貞に代表される武家方領国支配に反対したものであろうか。今川頼貞は、この年（貞和四年）の年末に、下鶴井公文職を播磨の清水寺へ寄進している。まさしく、守護の権能の一つである欠所地処分権の行使であった。三開山城・気比城・田結庄城など円山川右岸部には南朝に加担する有勢者がいたが、下鶴井庄も同様に南朝の勢力が入り込んだ土地であった。



写98　下鶴井庄田畠坪付帳（加東郡社町・清水寺蔵）

清水寺は康永二年（一三四三）、将軍家の祈願寺として祈祷精誠を勤める将軍家御教書の下付を願ったとき、今川頼貞がこれに関係している



写99　勝妙寺から見た山名氏の在所であった九日市中ノ町付近　「御屋敷」の地名も残されている。

ことから知られるように、今川頼貞は清水寺に深く関わりのある武士であった。そこで、下鶴井庄が欠所地となるや、重ねて清水寺のために公文職を寄せる配慮をしたものであろう。

性法寺城・五箇庄城・奈佐城　但馬守護・今川頼貞が下鶴井庄の欠所地処分をして間もなく、観応の擾乱と呼ばれる事件が起きる。尊氏と直義が争い、やがて直義が毒殺されるが、この間に南朝の勢力は大きくのび、正平七年（一三五二）の春、京都を回復したのに続き正平八年・十年と三たび京都に打ち入り、南朝の軍事勢力が拡大する。

特に正平七年は但馬南軍が一斉蜂起した時で、但馬守護・今川頼貞を但馬から追い出してしまい、但馬では南朝の年号が使用されてくる。このとき、出石神社社家は南朝の側に付いて南但に遠征しているが、豊岡市域の武士の動向は分からない。

また、正平九年（一三五四）には、石見国を根拠地とする足利直冬が上京作戦を企図した。反幕府を表明している山名時氏は、足利直冬の軍に支援を計るが、十月に入って中国の足利直冬の軍隊が但馬に続々と入り込んで九日市場に集結しているのも、九日市がすでに山名時氏の拠点として成立しており、時氏がまた、この基地を直冬軍に提供したからである。九日市場とは八条地区の九日市付近である。恐らく、市場が立ち人家が

集まって、背後の山なみには城が築かれ、前面の円山川も当時は、九日市方向に大きく屈曲しており、上下する船の帆の姿も見られたにちがいない。このあたりは円山川下流域の船着場で、円山川の水運と陸上交通の交差する交通の要所であった。九日市は当時、物資の集積・交換の場として地の利が十分に整備された場所であったわけで、ここに、足利直冬の軍が集結して、京に上がる作戦を準備している。海路を経て着いたものであろう。これに対して、南軍の将・石塔頼房は共同作戦を行ない、宿南に布陣して武家方の北上を阻止しようとしているが、石塔頼房の地位というものは一部隊長とでもいうべきもので、この時の事実上の南軍の総指揮官は山名時氏だった。南軍に参加した武士の戦功を賞し、併せて上京作戦の期日を告げて同道をうながしている。山名時氏は南軍の戦意昂揚期にあたり、但馬守護にも似た権能を行使しているのである。

これに対して、足利尊氏は南朝方の切り崩しを計る。今日まで敵であっても、武家方に戻ってくるならば本領を返してやろうと言うのである。小坂郷（八鹿町）の地頭・伊達貞綱は、先に山名時氏に従っていたが正平十二年（一三五六）のころには、はっきりと武家方に組みしている。それは当時、山名時氏が南朝に肩入れをし、南朝の第三回目の京都進攻作戦に従事し、敗れて因幡に引き上げている時だったからである。山名時氏を頼むに足らずとして貞綱は、武家方に寝返り、但馬の南軍と競うこととなる。

伊達貞綱の戦況報告によって知られる正平十一年の但馬の南・北軍の攻防戦は、円山川下流域でも展開している。三月二十七日、難波河原（八鹿町）に集結した武家方は、二十八日に温泉城を攻め、ついで五月十八日に宿南城、六月二十六日に八代城で戦闘が起きる。この時、貞綱は今川頼貞の指令を受けて部下の伊賀十郎を木崎の性法寺に遣わしている。八月七日の大坪城、八月十一日の五箇庄城の攻囲戦につづいて、八月十六日か

ら水生山（みずのおやま）城の戦いが始まる。水生山城の城将は、山名時氏の部下・長左衛門尉であった。長は、よくもちこたえたが七日目の二十三日に、水生山城は陥しいれられてしまった。ついで、戦火は奈佐に飛び二十六日、奈佐城が攻められ、息つく間もなく山を越えた八代城が攻撃される。この後も九月・十一月にかけて南但で戦火が交えられているのである。

この一連の戦闘記録によって、正平十一年の但馬の南軍の根拠地の所在が知られるが、水生山城と豊岡市域内では奈佐城の二城が南朝の拠点であり、性法寺が武家方の陣所であったといえよう。

水生山城は、豊岡市と日高町の境界線をなす国府平野の北方にある山なみである。水生山城の攻撃は、正面の国府平野から仕掛けられる一方、背面の佐野（八条地区）あたりからも試みられたことだろう。性法寺は正法寺（五荘地区）に建立されていた正法寺のことで、寺院の大きな建造物が陣所に転用されたものだろう。奈佐城の所在は分からない。奈佐地区には亀ヶ崎城・宮井城・岩井城・大谷城・小垣ノ城・石谷城・目坂城などの城地が存在しているが、奈佐城がこれらの中のいずれの城に当たるかははっきりしない。

三開山城下の攻防戦

正平十三年（一三五八）には、但馬の武家方を刺激するような情勢が起こる。足利尊氏が九州の宮方や足利直冬の党を討とうとしたので、これに呼応して但馬の武家方の行動が活発化する。さきに、山名時氏を離れて武家方になった小坂郷の地頭・伊達貞綱の戦闘記録を再び繰って見ると、六方平野に聳える三開山城に対する激しい戦闘が約七ヶ月近く展開していることが分かる。貞綱らは二月二十六日の大屋庄の上剣滝山の戦い・三月十一日の竹里城の戦いのあと、四月六日に大篠岡に参着している。三開山を包囲している武家方の本営が、大篠岡に置かれていたからである。しばしば三開山城に攻撃をしかけたが、七月四

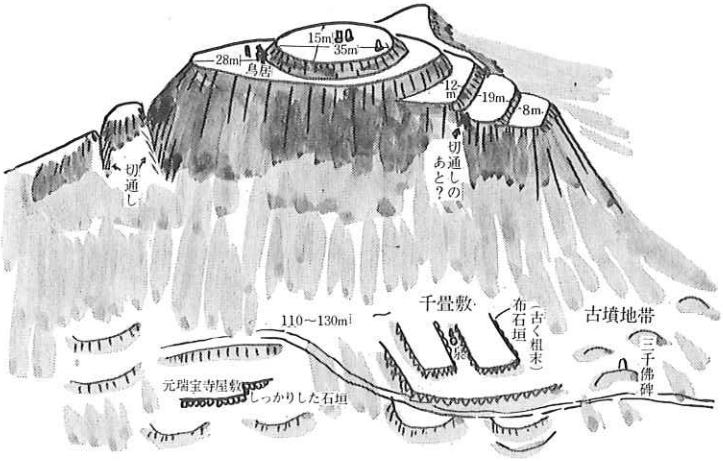
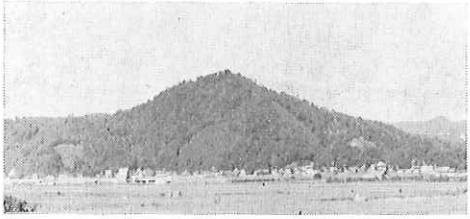


図55　三開山城概念図

日になると戦闘正面は山の手から六方田圃へ移る。三開山城に籠る南軍が、城を出て平野部に布陣したためであろう。そのうち、円山川が氾濫し洪水のため六方田圃が水びたしとなると、南軍は数百艘の船に分乗して武家方の陣を後方から襲ってきた。武家方では山の手の方に引き上げ、この攻撃をかわすが、伊達貞綱は左肩を射抜かれるような負傷にも屈せず奮戦して、南軍の船団を追い返したりしている。



写100　南西から見た三開山の山容

こうして、両軍対峙のまま冬を迎えたが、春以来の包囲攻撃に耐えかねたものか十一月二十六日、ついに三開山城は落城している。三開山城を巡る攻防は、こうして記録に見るところでは、三回も繰り返されている。三開山城は、東西に走る稜線を主軸に構築された輪郭式の山城で、中腹部には瑞宝寺屋敷・千畳敷屋敷・武家屋敷と言われる地も残って、

中世の山城遺構を今に伝えている。

昭和二十三年ごろの六方川の改修中、木内の川筋で武将らしい武具をつけた一体の人骨が出土しており、たびたびの合戦の間の戦死者らしく思われる。

山名、但馬守護となる

正平七年（一三五二）、但馬南軍が但馬守護・今川頼貞を但馬から追い出してから約十四、五年というものの間に山名時氏は、すっかり但馬の武士を勢力下に置いている。武家方から任命された守護として『太平記』が仁木弾正少弼の名を挙げているが、それは全く空しいもので、武家方の守護支配は有名無実の状態であった。貞治二年（一三六三）のことである。

これに対して、この年に山名時氏は、彼がその時までに手の中に収めた五ヶ国の守護職をそのまま保証するというなら、和してもよいとの条件で幕府と和解した。その五ヶ国の中には但馬は入っていないが、早くも貞治五年（一三六六）には但馬守護として長道全の名が見える。長は、山名時氏にいち早く付した但馬の武士で水生山城（日高町）にたてこもり、延元元年（一三三六）に武家方と戦っている。

将軍・義満があえて山名時氏の側近を但馬守護に任命したのは、もはや山名時氏が但馬を領国化したという既成事実を無視できなかったためである。山名時氏は、応安元年（一三六八）に家督を惣領の師義に譲った。しかし、師義は時氏の五男の時義を養嗣子とする。時義の代に入って応安五年（一三七二）、山名氏は但馬の守護職を手に入れる。守護代として但馬に下向した大草入道の入城先はどこであったろうか。記録の上では全く触れられていないが、先に性法寺の項で触れた正平九年（一三五四）、足利直冬の上京作戦の部隊に対して山名時氏が、九日市場を集結地に提供している点からして、山名氏の但馬の拠点は、いち早く円山川下流域に

設定されているから、下向先は九日市城だったと想定できる。

第二節　垣屋氏と豊岡

垣屋系図

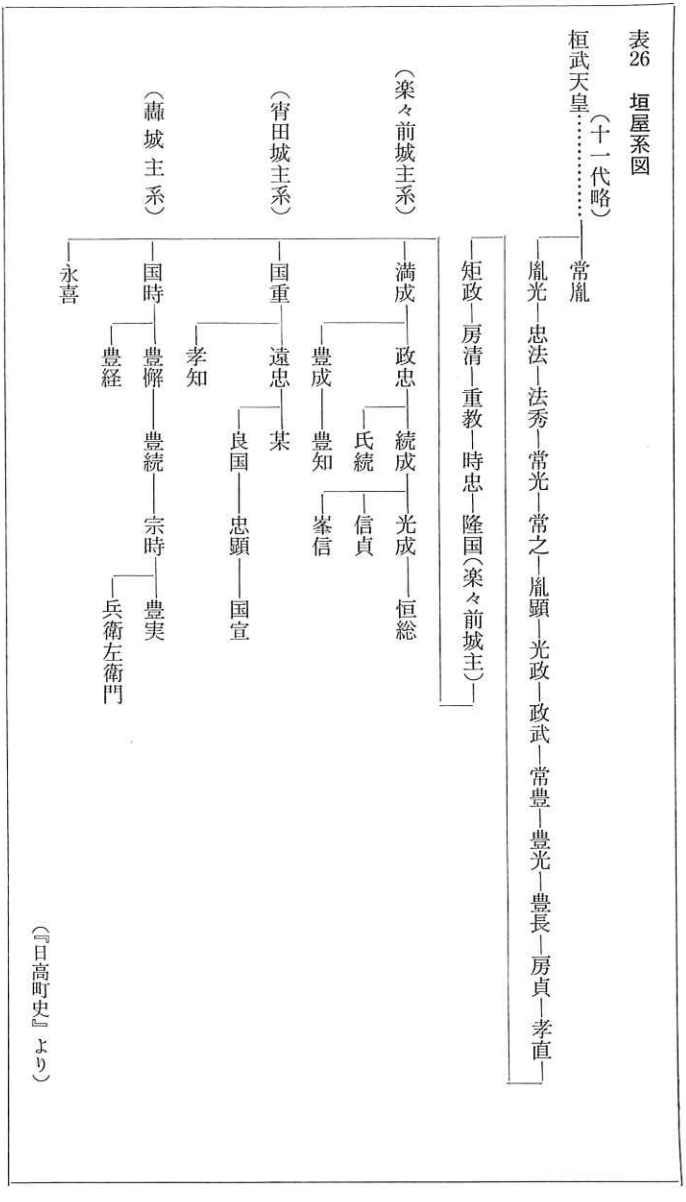
守護代として但馬に下向した大草の名前は、その後に記録の上では全く辿れない。やがて代わって、垣屋の名前が出現してくる。垣屋は山名時氏の活躍期に、すでに但馬、わけても円山川下流域に深くその力を浸透させていた。垣屋は、但馬生え抜きの武士ではなく、山名時氏に従って来住してきたものである。本姓は平氏で千葉氏の分流だといい、上野国沼田に居城して垣屋と称したのが始まりだというが異説が多く、平姓・伯耆の人とも、本姓は源氏・山名氏の支流だともいわれている。しかし『兵庫県史』3によると天隠龍沢の『翠竹真如集』の中の土屋越中守豊春の寿像賛に「人は垣屋と称するが、垣屋は自身で土屋を名乗っておる。また、源氏の出身である山名に仕えてはいるが、本姓は平氏であると明記している」とある。垣屋が後半、山名の守護代とも山名の四天王とも称せられているが、「土屋」を姓とするところから判断して相模国大住郡土屋邑より起こった土屋の中に上野国に所縁をもった者がおり、元弘の内乱期に上野国から山名氏が戦局の表面に躍り出るについて山名に付随し、やがて山名が但馬に足がかりを持つにつれて強勢化したものだったろうか。

垣屋重教と亀ヶ崎城

『因幡垣屋系図』によると山名時氏に従い来但したのは垣屋重教で、城崎郡奈佐庄亀ヶ崎城主となり、奈佐岩井庄に大原山養寿院を開基し、康暦二年（一三八〇）四月五日に卒したという。

ところで、亀ヶ崎という地名は現在、豊岡市五荘地区の大浜川の西側、福田と森津の境界山上にあり、当時は奈佐庄と大浜庄の境界線上であったと考えられる場所である。後になって垣屋続成は安田千松丸に新給地と

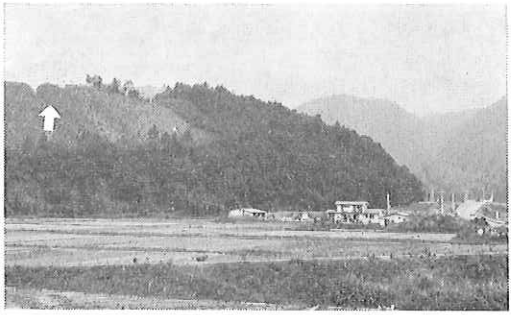
表26　垣屋系図



（『日高町史』より）

して大浜庄領家の半分を与えていることがあるから、垣屋にとって、亀ヶ崎付近は由緒深い地であった。

ではいつごろ、垣屋重教がこの地を手に入れたものだろうか。山名時氏が死んだのは応安四年（一三七一）のことで、時氏はこのころまだ完全に但馬を自己の分国としきらないで、今一息という状態だったらしいが、すでに康安元年（一三六一）に養父郡の地頭・伊達三郎蔵人を招致したとき、味方について忠節を尽くせば本知行地を安堵してやろうというほど但馬に勢力を拡大している。恐らくこのころ、尊氏側によって任命された但馬守護・今川頼貞の守護領である楽々前庄などは、すでにもぎ取っていたことだろうから、このころ垣屋は山名時氏の計らいによって、この亀ヶ崎一帯の地域の領有権を手に入れていたことであろう。

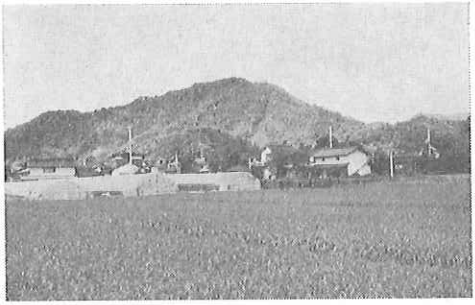


写101　福田橋から見た亀ヶ崎城跡　矢印が曲輪跡

山名が但馬支配のため新しい体制づくりを始めた時期に、早くも垣屋は山名の家臣として指導的な権力を手に入れている。垣屋重教が建立した養寿院と亀ヶ崎との間は、一キロメートルという至近距離だった。

山名時義と城崎

山名師義が天授二年（一三七六）に卒したあと、嫡家である師義の家の後見役に時義が入り込んだ。時義は父・時氏が生存中に因幡・伯耆の国で活躍していたが、但馬を手に入れて分国となし、但馬守護となった。時義の守護拝任は管領・細川頼元が師義・時義を与党に引き入れ、反対派を押さえるためだったというが、時氏以来やっとのことで公認化されたことを示している。時義は、此隅山（このすみやま）（出石町坪井）に築



写102　出石町宮内から望む此隅山　正面の山頂と山腹が要塞化されていた。

城した。此隅山はさして高山ではないが、出石平野も豊岡盆地も眼下に見下ろし、眼を上げれば彼の家臣となっている垣屋の観音寺城が直視される絶好の地であった。時義は長谷（神美地区）の荒原（あわら）に生えている燕子花（かきつばた）の美観を見るのが楽しみで、三河国の八橋（やつはし）に比していたという。時義は、康応元年（一三八九）に四四歳の若さで死ぬ。

時義は平素から驕慢で、将軍・義満の不満をつのらせていた。時義が但馬守護になったのは二七歳の若さであったが、ほとんど京都へ上がることなく、但馬国城崎にいたという。時義が居所とした城崎というのは、いうまでもなく九日市場のことであり、時義は病に犯されると城崎で療養したといわれるのも、城崎温泉ではなく、この九日市場のことであった。

九日市には「御屋敷」「丁崎」という地名が残っている。「御屋敷」というのは山名時義の居所と伝え、「丁崎」は「庁先」のことで、但馬守護が事務を執った居館跡に関係する場所だったと思われる。また、時義の娘は中山大納言の妻で、その間にできた子が日真で、後に日蓮宗の間では高名の僧となった。日真もまた文安元年（一四四二）に九日市の山名氏の居宅に生まれたと伝えられ、九日市が生誕地といわれている。

義満は、時義が城崎で下知に背くので、時義を誅伐しようとの気持ちを持っていたところ、康応元年三月に平清盛をまねて厳島神社に参拝し帰途、備後の国に立寄った。時義は当時、備後守護でもあったから義満を接

待しなければならぬ立場であったが病臥中のため、時義の嫡子・時凞が代わったため時義の不参は、またまた将軍・義満の怒りをあおったという。

垣屋時忠と明徳の乱

『垣屋系図』によると初代の亀ヶ崎城の城主・垣屋重教の子が時忠とあり、時忠も引き続き亀ヶ崎を居城としていたという。さきに将軍・足利義満は、山名時義を誅せんとしていた。時義は、将軍・義満の怒りを推し計る間もなく病没した。このあと義満は引き続き山名の勢力削減を計り、山名の内紛を利用した。明徳の乱といわれるのがこれで、山名時義の死のあとを受けて二三歳の嫡子・時凞が山名の宗家をついで但馬守護となり、弟・氏幸が伯耆の守護となったが、不満を持ったのが一族の山名満幸・氏清であった。将軍・義満は、この内紛を利用して明徳元年（一三九〇）に満幸・氏清に時凞・氏幸の追討を命じた。氏清は但馬を侵し、時凞は剃髪して三月二十五日に但馬を去り、備後に逃げ込んだ。代わりに氏清が但馬守護となった。

写103　山名時凞像（生野町・大明寺・提供）

流浪の時凞・氏幸の兄弟が上洛して義満に赦免を願い、これが許されそうになると山名満幸・氏清は怒って義満に反旗をひるがえした。戦いは明徳二年十二月の大晦日に起き、戦場は京都の内野であった。時凞・氏幸は二〇〇余騎を率いて、将軍・義満の本陣の側に控えた。一族が相争っているため、時凞は篠の葉を旗印の下につけて戦った。これが後年、但馬山名の家紋となるのである。十二月二十九日の夜、時凞は家僕どもを集めて明日の作戦を励ました。柿屋弾正・滑良兵庫頭を始めとして、相手は敵といっても日ごろ肩

を並べた間柄である。生き残って彼らに是非されるよりは、一番に討死して死力を尽くすと誓った。翌三十日の戦いでは、果たせるかな柿屋も滑良も弥陀の名号と曼陀羅を錦の袋に入れて、首に掛けて奮戦した。時凞ら十三騎が山名氏清の五〇〇騎に突入し乱戦の間に主従八騎となったが、囲まれた時凞を救出し、柿屋は身代わりに戦死している。

この明徳の乱の功で、山名時凞は再び但馬守護となったものの、一族相戦ったため、一時は十一ヶ国を算して日本全国の国数の六分の一を占めたために、六分一殿と称せられていた山名の凋落は甚しいものがあった。

このとき「柿屋」と記せられた山名時凞の部将は垣屋のことで、『垣屋系図』によると重教の子・時忠が「明徳二年十二月晦日、二条大宮の合戦に於て山名時凞の急を援けて討死す」とあるから、柿屋弾正とは垣屋時忠と考えてまず間違いではなかろう。垣屋は山名時凞軍の指揮官ともいうべき立場にあり、若い主君を援けて戦闘の陣頭に立ち、最後には身代わりに討死している。垣屋は早くも、時忠の代に但馬守護・山名の最高家臣の地位を得たのである。

山名持豊と九日市

山名時凞の死のあと持凞・持豊の二兄弟が家督を巡って争い結局、持豊が同族間の対抗勢力を一掃し、名実ともに山名宗家の地位を得る。持豊は宗全と号し、応仁の乱の西軍の将として史上に著名な武将である。

山名持豊が領国の但馬に下向したのは、記録の上では三回あって、そのすべては播磨出兵に関係していた。その一は、嘉吉の乱に際して播磨の赤松満祐を背後の但馬から衝こうとして、嘉吉元年（一四四一）七月二十六日に京都から但馬へ下向したときである。八月二十八日に垣屋・久世・羽淵らの将を従えて生野坂を駆け下

り、やがて赤松満祐を討伐してしまう。

その二は、文安元年（一四四四）十一月、さきの嘉吉の乱の論功行賞に不満を抱き、赤松満政を攻撃しようとして再び但馬に入ったときで、雪中を真弓峠から播磨に打ち入り、目的を達して翌文安二年六月十三日に但馬より京都に凱旋している。

その三は、享徳三年（一四五四）に播磨の赤松再興問題に関連して将軍・義政の怒りを買い、但馬に在国し上洛するなとの追放令を受け、十二月六日に但馬に下国し長禄二年（一四五八）八月まで四年間、在国したことである。持豊は嫡子の教豊に家督を譲って隠居し、代わりに持豊の子、教豊・是豊、孫・政豊が京都に出仕した。この時の在国中、山名の一門の精兵をすぐって播磨に攻め入った。

写104　雪の真弓峠から生野方面を望む
（兵庫県史編集室・提供）

享徳四年に山名教豊は、武者三〇〇騎、歩卒数千人を従えて四月、京都より但馬に入る。先陣は太田垣、二陣は田結庄、左は山名、右は垣屋・足達、小荷駄は滑良が奉行していた。かくして、また持豊・教豊らは播磨に打ち入り、赤松則尚を討っている。

右の三例のように持豊が但馬に下国したのは、すべて播磨の赤松の動向に原因していた。山名は、かつて播磨の国を所持していたが明徳の乱で播磨を失ってから、播磨回復保持は山名の悲願ともいうべき課題であったからである。

但馬に下った持豊は、いずれの場所を居所にあてていたことだろうか。

はっきりしているのは享徳三年から長禄二年の間のことで、赤松則尚を討った持豊は享徳四年五月二十八日に但馬に凱旋しているが、康正二年（一四五六）十二月に建仁寺霊源院内の瑞岩禅師を但馬に招いて、亡母の十七回忌供養を西光精舎で行なっている。このときの諷誦文に施主の持豊は明瞭に但州路城崎郡に居住していると記載しているから、この西光精舎というのは施主の居所に近い城崎郡のどこかの寺だと推定される。しかし、城崎郡内には西光寺が田結（港地区）の真言宗・西光寺と、九日市（八条地区）の時宗・西光寺の二ヶ寺があるが、持豊の孫・政豊が『大乗院寺社願事記』では九日市に在城したとあるから、西光精舎というのは九日市の時宗・西光寺と見てよいだろう。逆に九日市の西光寺に近い所に宗全の居所があったろうし、いわゆる屋形というものではなく「陣所」とも城とも言えるものだったことは確かである。

但馬守護・山名氏は、戦時には出石神社に隣接する総持寺裏の此隅山城を本城としつつ、平時には九日市の居館を守護の在所と定めて政務の中心としたと思われる。九日市は政治の中心として、また交通の要所として町場集落が形成され、交易の中心として定期の市立てが行なわれ、小京都的賑わいをみせていたことと思われる。戦国期に諸国を廻国行脚して歩いた連歌師・宗砌が山名宗全に迎えられて九日市に逗留したと伝えるのもあながちゆえなしとしない。

垣屋氏と九日市城

垣屋時忠の子、隆国は楽々前城の城主であったという。楽々前城は、日高町の三方盆地にある。近くに観音寺があり、鎌倉時代には、但馬守護・太田氏の守護領の一部であった。南北朝の争乱期を経て、但馬守護・今川頼貞に帰したが、山名氏が守護となるにともない山名のものとなったものであろうか。それを、山名時凞が明徳の乱に戦死した垣屋時忠の功に報いるために、時忠の子・隆国に与えたのであろ

う。

これを契機に、垣屋は日高町の稲葉川流域に勢力を張り、さらに円山川と奈佐川の合流点付近の亀ヶ崎にも拠点を設定しているから、その版図は広大なものであった。長祿二年（一四五八）八月に山名持豊が上洛してからは、主家の根拠地と思われる九日市城に留守居役をしていたらしい。

このことを示すのが、応仁の乱における文明三年（一四七一）の丹後・普甲寺山の戦いである。

西軍の一色の領地・丹後へ東軍の武田信賢が入ってきた。東軍の将・細川勝元は天竺賢実を応援に派遣して、一色信長を攻めさせた。丹後が東軍の手中に帰すると、但馬の山名の本拠は丹波・丹後の二方面から脅威を受けるので、山名は河口三河守・垣屋越中守豊春・同平右衛門尉ら但馬勢一万五〇〇〇人をもって救援させた。四月三日、宮津に近い大江山の北麓にある普甲寺山城で戦闘が始まった。この間に、垣屋出雲守が「但馬の九日（市）」まで逃げ帰ったというのである。垣屋豊春の奮戦ぶりにくらべ、同じ一族でも雲泥の差があると豊春をほめぬ人はなかったという。

写105　西陣の跡（京都市）　応仁の乱に山名宗全らが布陣した。

出雲守が留守居役をしていた、この九日市城を巡って文明三年、戦火が上がる。

戸牧山の合戦

応仁の乱は、山名持豊がしくんだ大芝居である。幕府の実権をにぎる細川勝元と山名持豊との権力争いが底流にあった上に、将軍・義政

の弟・義視と子・義尚の相続争いが直接の引き金となって、応仁元年（一四六七）に十一年に及ぶ戦乱が開始された。緒戦の京都・上御霊神社の戦いでは、西軍は持豊の部将・垣屋と太田垣らの奮戦で勝った。心奢りした持豊は論功行賞を行ない、召集した武士を国もとへ帰したが東軍（細川軍）がまき返し、京都で苦戦となった。このとき持豊の分国・因幡や備後の兵が、ひとまず但馬へ集結してきたのが、九日市城ではなかったろうか。『続太平記』によると応仁の乱に先立つ康正年間（一四五五～五七）、宗全・山名持豊は「木崎」にいたと伝えている。九日市城は、代々の山名にとって重要拠点であったからである。京都で膠着化した戦局が地方へ波及したとき、東軍が九日市城を攻めたのも、そのためであろう。

九日市城は持豊の留守中を、垣屋越前入道宗忠が持豊の孫の亀石丸の養育かたがた在城していた。文明元年三月二十三日、父・持豊と疎絶して東軍に組みしていた山名是豊の子・頼忠が九日市に乱入し、川向かいに布陣した。但馬の国人の中にも、奈佐太郎のように持豊に従わず頼忠に与同するものもあって、当辺羅（戸牧）山に陣どって九日市城を挟撃した。このとき、垣屋宗忠の子・平右衛門尉が宵田城（日高町）から駆けつけて、奈佐太郎の陣を攻めて追い崩したので、円山川東岸に布陣していた山名頼忠は、この敗報を聞いて逃走した。

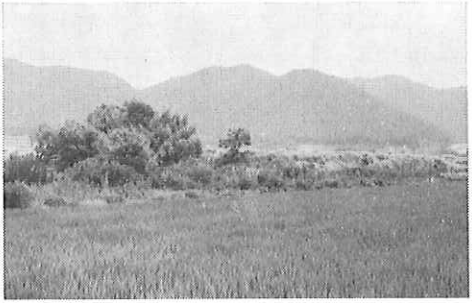
山名持豊と播磨

応仁の乱にかまけている間に、持豊が奪回していた播磨国は赤松氏の領国となった。持豊は再度、その挽回を策した。但馬とちがって播磨国は、生産・交通の面では要所である。手放すわけにはいかなかった。

持豊の死後、嫡子・教豊の子・政豊が家督を継ぎ、応仁の乱は、この政豊のときに終結したが乱後、政豊は在洛がちで帰国する部下も多かった。赤松が但馬・山名を牽制するため因幡・山名の一族・森二郎と結んで乱

を起こしたのは、このときである。幕府の制止をふりきって但馬に下国した政豊は、日ならずして因幡・伯耆に発した戦乱を平定、この機に赤松を討って播磨を回復しようとしたのである。

『実隆公記』によると文明十五年（一四八三）九月二十七日の条に「但馬一宮の鳥居の横木が玄月（一月）に落ちたという。その日は、政豊の出陣門出の翌日であった」とある。但馬一宮（出石神社）の北にある此隅山城は山名時義の築造と伝え、その居所でもあったというから、政豊が播磨出兵にあたってこの城に集結した可能性は多分にある。



写106　姫路市書写山麓の坂本城跡　山名政豊が、一時居城としていた。（兵庫県史編集室・提供）

この年以来、六ヶ年にわたり政豊の播磨進攻が続いたが、在地武士団の抵抗が強く、補給線が延びきっていて苦戦を強いられ、垣屋一族の大半が戦死するという痛手をこうむるような悲劇もあった。ついに長享二年（一四八八）、政豊は播磨放棄を決意して撤収した。

木崎城の包囲戦

播磨撤収に賛成したのは、山名の部将の中では田公肥後守父子だけで、播磨所在の領地に執着する部将は戦局の不利にもかかわらず戦争継続を主張して、但馬の国人頭二六人は政豊を廃して備後守護である嫡子・俊豊を擁立しようとした。

政豊は、田公肥後守の息・新左衛門が築いた木崎城に入ったが、従うものは田公肥後守と馬廻衆一〇人ばかりだったという。その中に宇津・下津屋の二人がいたが、恐らく播磨放棄を強硬に進言したためであろうか反政

豊派から憎まれていた。政豊の排斥には穏便な立場の垣屋さえ、手勢三〇〇〇人を率いて室野に陣して木崎城を監視し、隣には阿左古（朝来）衆、つまり太田垣勢が布陣していた。この包囲戦の結果を伝える記録はない。恐らく中間派的な垣屋の仲介で和融が成立したのかも知れない。しかし、但馬守護・山名政豊が多くの国人に見放されたということは、山名の権威の失墜を物語るものであった。

木崎城と室野

さて木崎城は、どこに築営されていたのだろう。これについて、当時の京都の寺の公用日記である『蔭涼軒日録』に、「金吾（山名政豊）、田公所居阻木崎者十八町許正法寺云寺也、木崎云ハ永泰院領乱束、田公押領地」という記録がある。文意のつかみ難い文書であるが、これによって次のことが判明する。

① 但馬に逃げ帰って、実際に居住していたところは、木崎（城）をへだたる十八町（約一・八キロメートル）ばかりの所にある正法寺という寺であったということ。

② その木崎城のある木崎（庄）は、鎌倉時代中ごろでは長講堂領であった（『但馬太田文』）が、いつしか永泰院領になっていた。それを田公が押領してしまった、ということ。

正法寺から半径十八町の円周上に木崎城の位置を求めるなら、後の田結庄氏の居城・鶴城から九日市城にあたるが、おそらく神武山から正法寺のあった山王山一帯が要塞化されていて、木崎城があったのだろう。

垣屋の陣した室野については、前にも触れたように現在、その地名はないが木崎城の包囲線内で、正法寺に近いあたりではなかったかと思われる。

九日在所の政豊

垣屋を盟主とする反政豊派が政豊を木崎城に囲んで見たものの、播磨奪回の呼び水とはならなかった。

明応二年（一四九三）七月八日、俊豊は父・政豊に対して実力行動を起こし、但馬に討ち入った。政豊側は不意をつかれたようで、重立った部将三人が戦死し、その他も四、五人が討ち取られた。反撃に転じた政豊は、七月十三日、反政豊派の部将・塩冶と村上らを討死させたばかりか、俊豊を切腹に追いこんだと噂されるほどの戦果を上げた。九日市城が政豊の在所として選ばれていたことであるから、ここが戦場であったと推定した

写107　山名誠豊の小田井社安堵状

（注）1.この守護職名は、時氏から相続したときの姿を示す。
2.○番号は、但馬国守護の、およその順を示す。

表27　山名氏略系図

い。

政豊の死のあと子の致豊が継いだが、垣屋との対立に疲れ永正九年（一五一二）、弟の誠豊が代わった。誠豊は、永正十五年（一五一八）、小田井神社の社家を安堵し、社人をして諸役に従わしめ、同社の法式を定めている。

それから四年たった大永二年（一五二二）、誠豊は垣屋らの主張に乗って失地回復をねらい、播磨に出兵した。山名にとって、三度目の試みであったが、一年と播磨を維持することはできず翌年、但馬に引き上げた。

誠豊の死のあとは、弟の祐豊が山名の惣領家となり、このころから戦国の動乱が激化するのである。

第三節　畿内と中国の勢力のはざま

轟城主系の垣屋氏

山名祐豊の時代に入ると、山名は播磨から閉め出され、西国から毛利の脅威が顕在してくる。山名は毛利の直接の影響を排除するため、隣国の因幡国を緩衝地帯として設置する方針をとった。祐豊は惣領家の立場から、因幡の山名に干渉して、因幡の国人の反感を買った。

毛利の攻勢の矢面に立ったのは、出雲の尼子である。尼子は永禄九年（一五六六）、毛利軍に本拠地を襲われ、譜代の諸将は諸国を流浪していた。京都に潜伏した山中鹿之助幸盛は尼子勝久を擁して尼子の再興を計り永禄十二年春、但馬に入った。糾合した尼子の残党は二〇〇〇人であったという。但馬で彼らを保護したのは、祐豊と垣屋播磨守であった。

このころ垣屋は一族繁栄して、惣家の楽々前城主系の他に、宵田（日高町）城主系と轟（竹野町）城主系の二分流ができていた。播磨守を名乗るのは惣家の楽々前城主系であったから、鹿之助らを助けたのは垣屋の本家筋であった。

この尼子軍を出雲に輸送したのが、奈佐日本之助である。

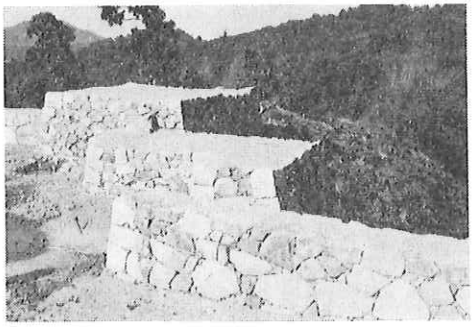
奈佐日本之助

奈佐氏は鎌倉時代の初め、朝倉高清の子を貰い受けて後嗣としているが、その名のとおり奈佐郷で勢力を張った氏族である。『但馬国太田文』には国御家人として奈佐高春の名が見え、文明六年（一四七四）の戸牧山合戦では奈佐太郎が戦死している。奈佐日本之助は、この一族に連なる者だったのであろう。

このころから戦国時代にかけて、割拠乱世にありながら日本の国の一体化の時代意識に啓発されて、「天下一」「日本一」「日本晴れ」といった言葉が使われ始めた。「日本之助」の名も、このような時代背景をもっていた。

奈佐の地が、豊岡盆地の干上がる段階で入江湖の汀線域であったこと、鎌倉時代に美方郡伊含浦の下司職で水軍の有力な組織者とも思われる宮井盛長が、奈佐谷・宮井の出身であること、などから円山川に臨み外洋との連絡に便利なこの地の伝統を受けた水軍の豪族の長として、奈佐日本之助は現われたものと推定される。

永禄十二年（一五六九）六月十三日、日本之助は船数百艘をもって、すでに但馬入りしていた尼子の軍団を島根に輸送し、再び出雲の地に拠点を確保することができた。この戦功のために、毛利氏の東進路線は阻まれた。この船団は、丹後から但馬にかけての漁民によって構成され、日本之助がその指揮官であった。



写108　富田城跡（島根県能美郡）
尼子勝久が拠り、奈佐日本之助が支援した。
（島根県広瀬町役場・提供）

織田氏の合力作戦

毛利は尼子の強大化と、その裏で糸を操る但馬の山名を排除しようと織田信長に山名討伐を頼みこんだ。織田は天下統一の前に山名を倒すべき敵と指向していたであろうし、その但馬の鉱山は大きな魅力でもあった。尼子が奈佐日本之助の援助で出雲入りを果たして二ヶ月目の八月一日、織田信長は出雲・伯耆・因幡三国の雲伯因合力と称して、木下秀長・坂井政尚らに畿内の兵力二万人をつけて、朝日日乗を軍監として但馬攻めを行なった。

十日たらずで、生野銀山・此隅（このすみ）山城・垣屋城など十八城を追い落し八月十三日、両将は引き上げた。作戦発起以来、二週間とかからぬ電撃戦で守護・山名が百数十年来、培ってきた但馬は壊滅し、山名祐豊は但馬を放棄して泉州の堺に亡命した。但馬に残ったのは、田結庄城と観音寺城の二つにすぎない。田結庄城は田結庄氏の居城で、このころには港地区の気比を出て田鶴野地区の鶴城、後の愛宕山に移っていたことであろう。

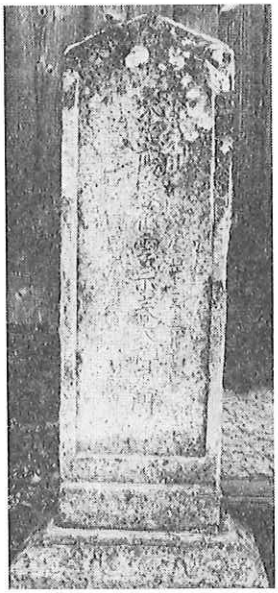
このころ祐豊が居城としていたのは、出石・此隅山城であったと思われる。祐豊が堺の町人・今井宗久の尽力で一〇〇〇貫文の礼銭を積んで、永禄十三年（一五七〇）の冬に織田信長から再び但馬入国を許されたのは子守城であった。これは此隅山城ではなく現在、お城山と呼ばれている有子（ありこ）山城であろう。後に天正八年（一五八〇）、祐豊が秀吉軍に攻略されたのがこの城で、祐豊には九日市城や木崎城は縁が薄かったらしい。

芸但和睦

雲伯因合力作戦を終えて但馬を引き上げた織田信長は、生野銀山だけは抜け目なく押さえている。祐豊は、東西から狭撃する織田・毛利の新興勢力について、掛け値のない認識を迫られる。当時、垣屋・太田垣・八木・田結庄を山名の四天王と呼んだが、四天王の織田・毛利に対する評価と対応は分かれ、垣屋の中の轟城主系は太田垣・八木と結んで毛利に属し、織田派の田結庄と激しく内訌した。信長は表面では毛利と手を握っていたが、裏では尼子を援助して毛利と戦わせていたので、但馬の織田派は尼子党ともいうべき立場にあった。海上のひとり狼・奈佐日本之助も、引き続き尼子を援けていた。

元亀元年（一五七〇）五月、尼子勝久の森山城奪還作戦には但馬・丹後の軍船・数百艘が参加、同年十一月には奈佐日本之助・山上丹波守指揮の五〇余艘が奈陀江（鳥取県米子市）作戦で毛利に敗れている。毛利は、将軍・義昭が丹但の船軍の動きを封ずる禁止令を発するよう、信長に依頼するほどで、日本之助らの活動に手

写109　奈佐日本之助・塩冶周防守の慰霊碑　（鳥取市丸山の山麓）



写110　田結庄是義の供養碑　慶長12年に家臣が建立した。（来迎寺）

を焼いたのであった。不思議なことに、このころから天正九年にかけての十二年間、奈佐日本之助の名は史料から姿を消す。次に現われるのは、秀吉の鳥取城攻略のときである。

こうした但馬水軍の協力にもかかわらず、尼子は追いつめられ、但馬は毛利に占拠され、但馬の織田党は屏息して毛利党が伸びたが、三たび回復した尼子の討伐共同作戦を内容とする和平条約を出石・有子山城で批准することで両者は手を結んだ。

野田合戦　天正三年（一五七五）には毛利と織田の対決は決定的となり、偽装の和睦は破れて、但馬の両派の争いも熾烈なものになった。織田党は毛利と戦う尼子の援助に乗り出すことで、尼子の優位に便乗して但馬の自派の勢力の拡大を計った。この年、尼子の山中鹿之助を助けたのは「宵田・西下・城崎・田結庄」であったというが、「宵田・西下・城崎」とは地名と重なる呼称であるから日高町の堀付近や豊岡周辺の土豪であったろうか。両派の対決が、垣屋と田結庄の私闘の形をとったのが野田合戦である。

伝承では、その原因は私怨によるものであるとしている。天正三年五月に田結庄是義と垣屋播磨守豊継が、但馬・山名初代の時義が三河国の八橋になぞらえて宴遊した神美地区の長谷に燕子花（かきつばた）を見に出かけた。是義の宴たけなわのころ、垣屋の家臣が鳥を撃った鉄砲玉が、是義の宴席に飛びこんだ。怒った是義が、その家臣を斬ったことから両者は不和になり、豊継は遺恨を晴らす機会を窺っていたというのである。

その後の経過は、江戸中期ごろ書かれた軍談書風の但馬史書に詳しいが、内容を裏づける資料はない。

田結庄の出城・海老手（えびて）城（五荘地区・滝と森津の大浜川西の山上）の城主・栗坂主水（くりさかもんど）が十月十五日、奈佐地区岩井の大原山にある養寿院に参詣の留守に、垣屋駿河守・長越前守らの三〇〇騎が海老手城を略取、宮井城

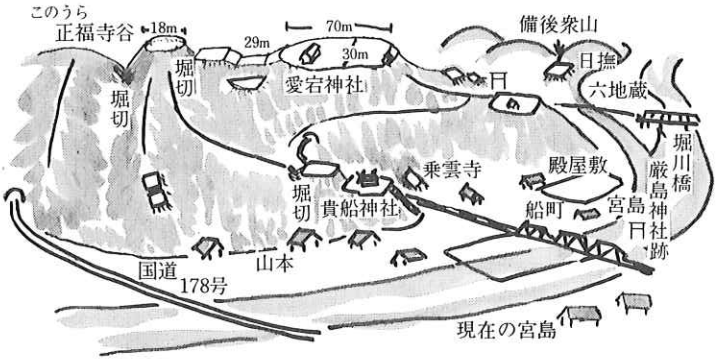
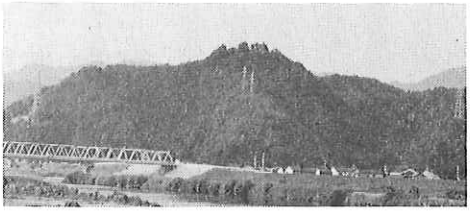


図56　鶴城概念図

を攻め、大原山を焼き払った。栗坂主水は海老手城奪還のため救援を田結庄是義に求めたので、是義は手勢五〇〇騎を差向けて長越前守が立籠る海老手城を包囲、奪回寸前のとき豊継軍三〇〇騎が野田（現在の国鉄・宮津線の川西一帯の沿線部）に布陣した。田結庄は軍勢を二分、三〇〇騎を野田に派遣したが、泥中の戦闘のため、足ながをつけた垣屋勢に分があり田結庄軍は一日市村へ撤退した。途中、田結庄側の篠部伊賀守をはじめ離反して垣屋側に降るものがあり、垣屋の別動隊が着陣して小田井神社に放火して気勢を上げ、鶴城下に迫った。一日市村に集結していた田結庄軍は、渡河して野上村へ退却中に追撃され、力尽きた是義は菩提寺・正福寺（旧・正福寺。国道一七八号線下宮バイパス・トンネル南口にあった）に入って自害したという。



写111　田結庄是義の居城・鶴城があった愛宕山の遠望　（手前が円山川と堀川橋）

野田合戦の戦死者の墓所と伝えるものは、五荘地区下陰字二の倉の畑地にあり、墓畑と呼ばれていたが、今は取り払われている。

『野田合戦軍記』が記す戦闘の経過はともかく、合戦が行なわれたことは史的事実で、それを裏づけるのが同年十一月の垣屋から毛利元春あてに出された報告である。田結庄を討って海老手城を入手した、とある。

田結庄氏

『七美郡誌稿』によると、田結庄氏の先祖は桓武天皇の皇子・葛原親王であるといい、七代目の越中次郎兵衛盛継が但馬国二方郡余部庄、後に城崎郡気比に隠れ、捕えられて誅せられたが、その子の五郎盛長が田結庄に住んだため田結庄を称した。承久の変で但馬へ配流となった雅成親王を、長井次郎とともに守護したという。その後、樋爪庄宮井に移って宮井五郎左衛門を称し、樋爪庄や二方郡大飯庄伊含浦の下司に任じた。その子の宮井太郎兵衛尉盛重は文永年中（一二六四～七五）、父と同じく樋爪庄や伊含浦の下司となったが、盛重の子・盛行の代に田結庄に帰住、再び田結庄を氏姓とした。

盛親の代に山名の旗下に入り、山城守盛敏が歴戦して功を立て、山名の四天王の一人に数えられるにいたった。左近将監国盛も山名時凞に仕えた。対馬守重嗣は山名持豊の旗下で嘉吉二年の播磨進攻に軍奉行として従軍、応仁の乱には西陣に駐屯した。『七美郡誌稿』によれば、田結庄氏の世系は次のとおりである。ただし、『七美郡誌稿』は、依拠した出典を明記していないので、どこまで真実を伝えているか知るすべがない。

田結庄氏系図

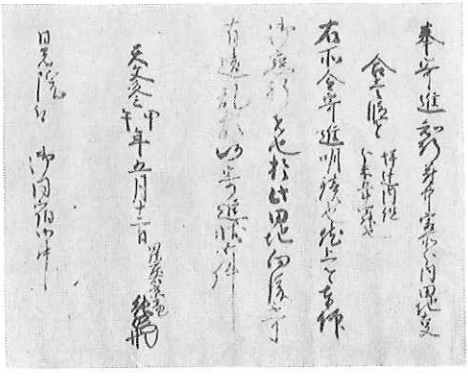
桓武天皇―葛原親王―（五代略）―貞盛―（七代略）―越中次郎兵衛盛継―盛長―盛重―盛行―盛親―盛敏―国盛―重嗣―是義

田結庄氏と但馬守護・太田氏との結びつきについては、すでに推定的に触れておいた。

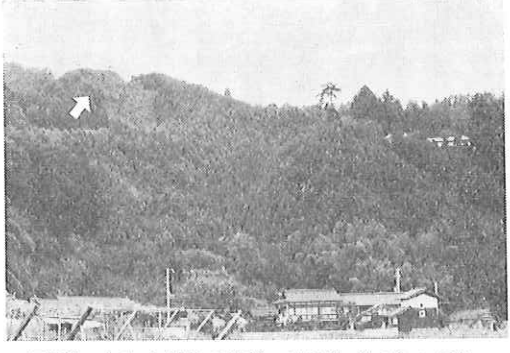
『日光院文書』では永正十四年（一五一七）、田結庄弥六持久なるものが、願意達成のとき知行内の田地二反

を寄進すると申し出ている。天文三年（一五三四）には、田結庄右京亮某が府中最所（税）（日高町）分の田地一反を寄進、武運・家運の長久を祈っている。弥六といい、右京亮某といい、田結庄系図中での位置づけは不明であるが、田結庄一族が分有している土地の一部が日高町にあったことがわかる。

嘉吉の乱後に播磨国明石郡の郡代に任命されたのは田結庄周防入道だというが、これは重嗣のことであろう。応仁元年（一四六七）五月下旬、山名持豊が領国から召し寄せた軍勢中に、但馬では垣屋・八木・舁ノ庄・太田垣の名が見えるが、「舁ノ庄」が田結庄のことであるから、応仁の乱の時期には田結庄は、山名の四天王に列しているのである。

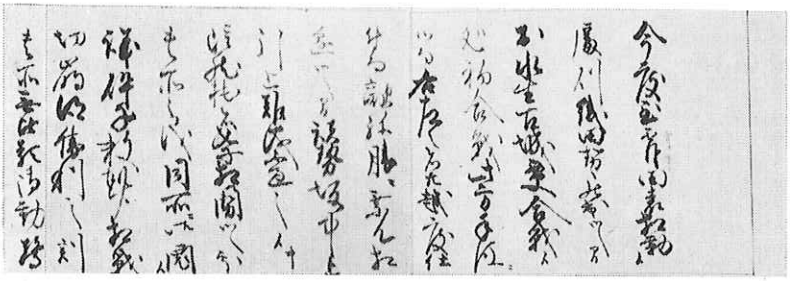


写112　日光院（八鹿町）への田結庄右京亮の田地寄進状（天文3年〔1534〕）（日高町・提供）



写113　水生山城跡の遠望　曲輪跡（矢印）と長楽寺（右手山上）が見える。

延徳三年（一四九一）、将軍・義稙（よしたね）（義材）が近江の六角氏を攻めたとき、備後守護・山名致豊の旗下に、また永正元年（一五〇四）に垣屋が出石の此隅山城を襲ったとき、籠城軍中に、それぞれ田結庄の名が出るが、やはり田結庄氏のどの系譜に連なるのかは不明で



ある。

山名氏の滅亡

織田党の田結庄是義の死は、毛利党である垣屋の地位を安泰なものとした。垣屋の威勢の前には、但馬守護・山名祐豊といえども、いまやその存在は空しいものであった。祐豊は、さきの芸但和睦の条項に背いて織田党への傾斜を深めた。しかし、織田と毛利の対決が当時、「日本二つの弓矢」と表現される情勢下で、戦国大名としての体質の欠除を見抜かれた祐豊が、どんな方策を巡らせても所詮、二大勢力のいずれの側からか排除される立場にあった。垣屋の要請で一度は入但した吉川元春も、播磨・丹波から迫る織田勢に押されて天正七年九月には但馬を放棄して、その後、織田勢が完全に但馬を制圧するのである。

天正八年、秀吉は因幡進攻を策定するが、背後をつかれないように但馬を確保する必要があり、弟の秀長に命じて但馬を攻略させた。秀長は宮部継潤らと、同年四月から五月にかけて但馬を平定する。祐豊の居城・出石有子山城が落ちたのは五月十六日のことで、ここに南北朝以来二〇〇年にわたり但馬に君臨した守護大名・山名の嫡流は亡びた。

水生山城の攻防

秀長軍は出石攻略を最後の軍事目標としたが、豊岡市上佐野と日高町の境界にある水生山城も、早くから宮部継潤の

写114　垣屋豊続感状　水生山城の合戦後に岡遠江守に与えたもの（『田結庄文書』）

率いる織田勢に攻められた。この城につめたのは、毛利党の最右翼である轟城主・垣屋駿河守と同平三をはじめ、林甫城主・長某、上郷城主・赤木丹後守、伊福城主・下津屋伯耆守、国分寺城主・大坪又四郎、宮井城主・篠部伊賀守であると軍記物は記している。落城の日がいつかは不明であるが、四月十八日には垣屋方の古志因幡守の一族・左衛門尉が戦死し、山名氏政は下津屋丹後守を遣わして古志の軍功を賞している。

攻囲軍の様子は、山鹿素行の『武家事紀』で知られる。

「秀吉、播州をこえて但馬征伐の時、山名老臣・垣屋駿河守、但馬に在国す。これによって垣屋三千の兵を率い水尾に出て陣を張る。先陣は長の某七百余、二陣に垣屋孫三郎に徳吉・安長という両家老が相加わる。三陣に駿河守逞兵（強兵）をすぐりて出撃す。寄手は伊藤与三右衛門三千ばかりにて押し寄せ、宮部はわずか五、六百ばかりにて押し寄す。宮部主従八騎みな武羅をかぶって、まっ先にかけ入る。そのころ但馬の人、いまだ武羅を知らず。故にこれを見て大いに驚く。垣屋先手、長、戦死す。伊藤つづいて相かかる。孫三郎が備え堅く守り、力戦して伊藤ついに安長にうたれ、兵士悉く敗軍し、その日の戦はやみぬ。その後、数回の対陣に垣屋ついに秀吉の陣に降じて但馬平定す。世に水尾合戦という。但馬は美濃守秀長に賜る。宮部三万石を賜り、垣屋これが与力

たり」。

下津屋と篠部

水生山城籠城者の中の下津屋伯耆守は、日高町では伊福城主であったと伝えているが、その年代はわからない。下津屋は篠部と並んで、但馬の軍談風の歴史の中では次のように語られている。

因幡国で滑良兵庫と伊達新助の二人の武士が争い、収拾に手を焼いた守護・山名棟豊が在洛中の惣本家・山名宗全に援助を頼み、但馬在国の篠部伊賀守と下津屋伯耆守が直ちに命を受けて討伐したとある。この両者は、早くから山名についていたのであろう。すでに触れたように、水生山城合戦で戦死した古志氏を主君・山名氏政の代理で弔慰したのが下津屋である。

下津屋は山名家臣団の中では四天王級ではなかったが、中堅級として画策、山名政豊の播磨戦争では垣屋・太田垣などの戦争継続の強硬論に対して撤収論を唱え、家臣団からはうとまれる立場に追いこまれていた。

下津屋安芸守は、伊帙美作守らとともに泉州・堺に亡命中の山名祐豊が但馬に戻るとき、祐豊の居城・有子山城を占拠していた垣屋を放逐しようと城を攻めている。

永正五年（一五〇八）七月、下津屋新三郎という人が但馬守護・山名致豊から但馬各地の知行地と清冷寺分の代官職を受けていることは先に述べたが、このとき備後・播磨・伯耆の諸知行地を安堵してもらっている。但馬だけでなく、山名の勢力範囲の各所に多くの所領を持っているわけである。四天王といわれる人たちは郡代に補せられているから、下津屋はそれより行政的に狭い地域を安堵されていて、山名の中堅家臣としての地位を築いていたものである。

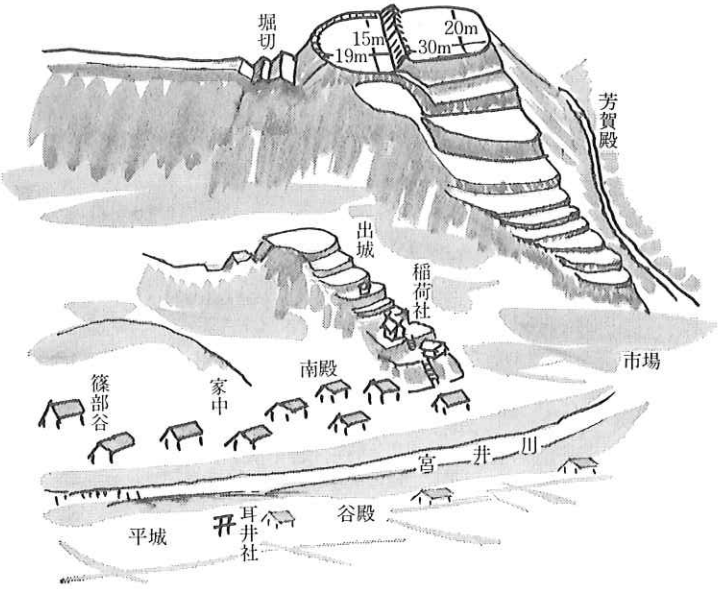
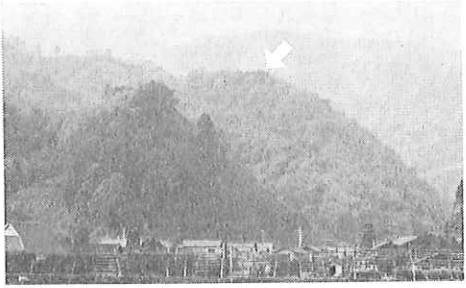


図57　宮井城概念図

篠部の名は軍談風史書に散見するだけであるが恐らく香住町域に生長し、奈佐氏が滅亡のあとの奈佐谷に進出してきた豪族であろう。奈佐地区宮井城を拠点とし奈佐谷の奥で勢力を得た中沢内蔵之助を滅ぼして、奈佐全域に勢力を振るったと伝えている。



写115　宮井城跡（矢印）
手前の森（稲荷神社）には出城があった。

三開山落城伝説

秀吉の因幡進攻にともなう但馬平定のとき、三開山城も落城したという伝承がある。兵糧攻めを受けた籠城軍士が、水の不足を包囲軍にさとられまいとして、目につきやすい場所に軍馬を引き出して米を背に流しかけて洗うふりを見せた。窮迫の果てにも、城兵は秀吉の軍門に降るのをいさぎよしとはしなかったのである。しかし、三開山城下の村の老女が事実を秀吉軍に密告したため、包囲軍は強襲に転じて城を落したという。

別の所伝によれば、九日市の妙経寺に火をかけて、この火明かりで城を攻めたともいう。このような籠城伝説は各地に語り伝えられているし、室町末まで三開山城が存在していたかどうかも不明である。

秀吉軍は五荘地区の江野を越えて、竹野谷に入った。轟城主は垣屋の中でも毛利との提携に熱心であったから、秀吉軍の攻略目標とされたものであろう。

国衆とその配下

山名が垣屋らを連れて但馬に入りこんでも所詮、但馬人にとっては「遠つ人」であった。それに山名は、赤松・一色・京極と並んで室町幕府の侍所（さむらいどころ）の最高長官である所司に交替で任ぜられる家格をもち、京都に居館を構えて在京することが多く、但馬とは緊密な関係をもつことはできなかった。

応仁の乱を契機として、在京のまま守護代に但馬の統治をまかせることは情勢が許さなくなって、いやでも在国し土着の国衆を取りしまる必要が生じてきた。それだけ国衆の勢力が伸びたわけで、動向によっては守護・山名といえども足もとをすくわれかねなかったのである。山名政豊が播磨から木崎城に逃げこんだとき、田公の支持を得ただけで国人はすべて背いた。

このような国衆で豊岡市域に関わる人びとは、やはり軍談風史書に見られるだけで確実な資料的裏づけはな

い。

応仁の乱の緒戦に次ぐ戦闘に馳せ参じた将士の名の中に、三宅主計扶朝と赤木丹後守勝重がある。三宅氏は穴見城主、赤木氏は中ノ郷城主と伝え、赤木氏は後に水生山城に籠城している。先に触れた中沢内蔵之助・栗坂主水・篠部伊賀守の名も、ここに加えなければならない。野田合戦の田結庄是義の与力被官としては、上山平左衛門尉・岡部大勝・成田靱負亮・赤部悪右衛門・津田伊助・村尾伊右衛門・村尾平三・鳥羽大炊・山崎左門・岸田蔵太夫・岸田五郎太・岡部藤蔵・大隅玄番・寺谷孫助・浜瀬兵衛・浜源助・大谷一馬・福丸外左衛門・成田是繁・福丸定景の名がある。

これらの中で、史料的に明証のあるのは大隅玄番で、六地蔵の河本家文書中の「大隅玄番屋敷」がそれである。この屋敷を天正九年（一五八一）、野田庄の荒地打開の功によって鈴木三郎左衛門が百姓頭に任命されるときに入手している。欠所地となった大隅の屋敷地を、あらたに豊岡城主となって入部した宮部善祥坊継潤が欠所地処分権を行使して、鈴木に与えたものである。恐らく大隅玄番は、野田合戦か、秀吉の但馬進攻に当たって戦死するか、没落したものであろう（写133参照）。

豊岡の柳行李の創始者は五荘地区森津の成田広吉だといわれるが、山名の陪臣の子孫だと伝えていることからも、あるいは田結庄是義の被官・成田靱負亮の家系と関連しているのかも知れない。

この他の国人たちの名が、全く架空であるとは言い切ることはできない。土地の伝承の中には、たしかな核となる話に肉づけされている場合が多いからである。

第五章　中世の農村と宗教

第一節　中世の仏教

中世の石造遺物

市内に残る中世のものと見られる石造遺物は、次表のように層塔・宝篋印塔・石幢・石像を主とする。そのすべてが仏教に関わるものであることは、当時の石造物の建立動機や今日に至る保存事情から当然である。層塔・印塔は中世以前の寺院仏教に結びつくものといえるもので、寺の大檀那ともなる特権階級のものであるのに対して、石幢・石像などは寺院とは関わりのない庶民仏教ともいえる民間信仰を基盤とする。前者は個人の供養塔または墓標の意味を持ち、後者は地蔵信仰と結びつくものが多い。

鎌倉期までの石造遺物は全国的にも稀少で、市内の中世石造遺物も時代的には鎌倉後期以降のものとされている。

日撫地区の宝篋印塔は田結庄是義（天正三年戦死）の、新堂地区の印塔は栗坂主水（同年戦死）の、それぞれの供養塔と伝えられるが、ともに南北朝後半期のものと見られる。気比地区の白山神社の印塔は、鎌倉時代初期に斬られた越中次郎兵衛盛継の供養塔といわれるが、やはり南北朝の作と見てよい。